

第三章土地利用：調査地域の土地利用は都市的土地利用と農業土地利用に大別される。静岡市は同心円状に東海道以南に発展しており、市街地に隣接する地区は市の郊外としての性格を有する。工業的土地利用は清水地区程度まではない。

一方、農業土地利用は、調査地域の土地利用として最も重要である。初期の形態は、自然条件に適応した形であったが、次第に社会的、経済的条件等に作用されて今日見るに至ったと考える。農業は概して多角的、美的である。且つ、主観自論的ではあるが、気候、交通に恵まれ、蔬菜は栽培品種が多く、苺をはじめ促成果菜類、茶、果樹などの純高産作物の栽培が特に盛んに行われている。又能地区をはじめとするこの地域は、典型的な遠郊農村といえる。しかし、最近は市街地の拡張によって耕地が減少し経営規模は零細化しているが、静岡、清水両市の近郊農村として、又京浜地区の遠郊農村として、更に経営が合理化されることが望まれる。

柿岡盆地西部の地形と土地利用

戸 嶋 多 恵 子

ある地域を理解する為には、その地域の自然及び文化の各要素を考察し、究極的には各要素あるいは要素群の綜合の過程を経て、地域性の綜合的把握にまで至ることが必要である。

この論文では、地域の自然的要素として最も重要で、基本的なものの一つである地形とその地形からみた土地利用を中心にして、そこから地域性の把握を試みた。この論文で取り上げた地域は、茨城県筑波山東麓に位置する柿岡盆地である。

X X X X

この盆地は、山麓線が不規則な形状を示すこと、盆地内部に扇状地が無く又扇状地性の堆積物もみられないことなど、現在の地形から推定すると、明らかに侵蝕盆地 (*Ausräumungsbecken*) の特性を有した盆地であるということが先ず云える。

又、西縁、北東縁の山地山麓部に緩傾斜の *granite* よりなる侵蝕面が発達している。この侵蝕面は *granite* の岩盤の上に *granite* の風化層を *matrix* とする *granite* の歪角礫層をのせている。又、この侵蝕面は、地質上の関係が密接で *granite* の山地に限って分布する。このことから地質が侵蝕面形成の一要因となっていることが推察できる。この侵蝕面は高度

ロームの有無から2段に分かれている。形成期は高度関係及び面の連続性から考えると後に述べる台地の形成期に対応することが出来る。

次に、この地域の地形を地形分類によってや、詳しくみると、山地、丘陵地、台地、低地に分けて考えられる。このうち丘陵は盆地内に島状に残存するもので、周囲の山地と地質を同じくする。

この盆地の内部をみたしているのは、主に台地、低地である。先ずこの地域の台地の構成物質は成田層である。成田層は関東平原の東半部を占める常総台地の基盤をなして広く分布する才田紀の海成層である。この台地は南北東西方向に於ける高度差が殆どないことが特徴で、隆起海岸平野である。東側に接する常総台地と同じく成田層からなるこの地域の台地は常総台地比べて着しく開析が進んでいる。常総台地が若い侵蝕谷の発達する若い低平な台地であるのに対しこの地域の台地は古い老年谷の発達する小起伏の台地である。このように常総台地に比べ開析度が進んだ地形に至った要因として山寺りという特殊な位置にある隆起海岸平野であること、基盤がわりに浅いところがあり堆積層も厚くなくその基盤の形に支配されたことなどから常総台地より早く侵蝕されたと考えられる。

この台地を更に細かくみると、高度から上、中、下位の三段に分けることができる。高度は各々80~45m、40~20mのものと谷底との比高0.5~1mのものである。下位台地は比高0.5~1mで谷に沿っていること、又その形態などを考え合わせると、他の二段の台地と異り、段丘であると思われる。下位台地を除く二段の台地面は40cm内外の鹿沼浮石層を挟む1~3mの関東ロームに被覆されている。従ってロームから関東地方の標準的地形面に対比すると鹿沼浮石を挟む中位台地は武蔵野台地に対比され相対的高度関係から上位台地は下末吉台地に対比される。この地域のロームの特徴は(1)ロームがClay質であること(2)浮石の粒径が0.3~0.5cmで小さいこと(3)ローム層が薄い。又全く除去されたところも存在することなどである。これはこの地域が関東地方としてはロームのoriginから遠い地域にあたっており又筑波山塊の横にあるという位置の関係、小起伏に富むという地形の関係からこのような特徴をもったに至ったと考えられる。

以上のような台地に対し、沖積層よりなる低地は広く低平な老年地形を呈する。この広い低地面に比べ現在の川中は非常に狭く2~4mである。このような形状からこの広い老年谷は沖積期の沈降により弱れ谷が形成されその後隆起したものと考えられる。南北に於ける高度差がない為排水不良の低湿地を形成している。

以上のような地形的特徴を示す台地、低地の土地利用状態を概観してみよう。
台地は主として畑地その他樹園地、林地として利用され、低地は水田に利用されている。この地域の土地利用は常陸台地、両総台地によって代表される関東東的性格即ち耕地の開発程度が低く平地林などの未開墾地を多く残し土地利用も相対的即ち水田は一毛作で反当収量も低く畑は自給的色彩の濃い作物が栽培され農家一戸当りの経営面積も広いというような特色をもうっている。然し一面では山麓部に於ける気温の逆転という特殊条件も加わって山麓地帯にまで果樹栽培が取り入れられ東京から90kmという位置の条件から東京を市場とする産果樹の導入も始められているなどの特徴も有している。だが依然として古くから取り入れられてきた米、麦、煙草が現在でもこの地域の換金作物として主要な地位を占めており山に囲まれ交通を阻害されてきたというこの地域の位置や、住民の意欲などの条件と相まって停滞的な土地利用を示している。

房総半島における河岸段丘地域の 地形と土地利用

—— 湊川および小糸川流域の例 ——

野崎 香奈子

I はじめに

この卒業論文は、ある小地域の地形と土地利用の現状を把握する場合、自分での程度まで調査し、まとめ上げる事が出来るか、ということを確認してみることに目的を置いている。いいかえると、地形および土地利用についての調査は、その地域の性格を知る上の一助として行ったのであって、最初からこの調査に特別な目的を持たせているわけではない。

調査地域は房総中部の湊川、小糸川両流域とした。この地域の選定にあつては、①地形が土地利用の少なくともいずれかに興味を持ってその独自性を持つこと ②資料が適当にあつて、なお且つあまり研究されつくされていないこと。③現地調査に障害が少ないこと ④2万5千分の1の地形図が揃っていること。などを考慮した。

なお、地形及び土地利用とも調査地域内の詳細にふれる前に、房総半島の地形および地質、千葉県下における土地利用についての概観を試みた。

II 地 形

房総半島一帯は、一般にオミ系以降の新しい地質よりなり、且つ地盤運動の跡が著しい。従つて調査地域の両河川流域にも、数段の河岸段丘がみられ